

【研究ノート】壺岐島の古式土師器

宮木 貴史・松元 一浩

はじめに

壺岐島は、玄界灘に浮かぶ南北約 17 km、東西約 15 km の島である。福岡県と対馬市の上に位置しており、その地理的環境から、古来より日本と大陸・半島とを結ぶ交流の中継地点となっている。

島内最大河川である幡鉾川の下流域には、長崎県内最大の沖積平野である深江田原がひろがり、そのなかに原の辻遺跡が位置している（第 1・2 図）。国内最古の船着き場を有する拠点集落であり、魏志倭人伝にみる一支国の王都として注目される。

原の辻遺跡の弥生時代～古墳時代前期の土器は、原の辻遺跡発掘調査報告書の総集編 I（2005）及び総集編 II（2016）において、宮崎貴夫氏及び松見裕二氏により編年案が提示されている（宮崎 2005、松見 2016）。宮崎氏は弥生土器を 12 期、古式土師器を 4 期に、松見氏は弥生前期から古墳初頭までの土器を 6 期に区分している。今回は大会のテーマに即し、時期が細分されている宮崎編年に堅穴建物跡出土の一括資料をあわせ検討する。

1. 資料の検討

（1）分類の基準

①各器種共通

甕や壺の底部について、時期差を顕著に示す属性として、平底・平レンズ底・レンズ底・尖底・丸底に分類する。体部形態について胴部最大径の位置に着目するほか、長胴を在在要素、球形胴を布留系要素としてみていく。また、甕や壺の口縁部や高坏の坏部・裾部等について、外反・直線的・内湾といった形態や長さ、傾き、屈曲の程度に着目する。口縁部や高坏・器台裾部の端部について、面取り・沈線・丸める・舌状に分類する。ほか、系統的要素である調整について、ナデやハケ（方向）のほかタタキ（方向・太さ）や回転ナデ技法や器壁の厚みもみていく。

②甕

口縁部形態の庄内・布留系要素として「上部内湾・内湾」を、布留系要素として「肥厚」を加え分類する。口縁端部形態の庄内・布留系要素として「外側摘み上げ・内側摘み上げ・両端摘み上げ」を加え分類する。頸部形態について内外面に稜をなすか、稜を押さえて面をなすか、庄内・布留的要素として、外面を削って面をなすかをみていく。

③二重口縁壺

二次口縁部について内湾・直線的・外反等の形態や、内傾、直立、外傾といった傾きの程度、口縁端部の屈曲の程度をみていく。また一次口縁部について長さと頸部との接合（連続成形の場合「直線的、外反」の程度、屈曲の程度）をみていく。頸部について長さと太さの程度をみる。

④高坏

口縁部の長さや形態、傾き、屈曲や坏部の上半に対する割合、脚部の長さや柱状・中膨らみといった形態や開き具合、形態坏部との接合法をみていく。

⑤小型丸底壺・鉢

口縁部の長さや体部径との比率についてみていく。体部形態について、扁球形かつぶれた扁球形、あるいは鉢状になっているかで分類する。細密なヨコミガキ仕上げがされているか、粗いか、省略さ

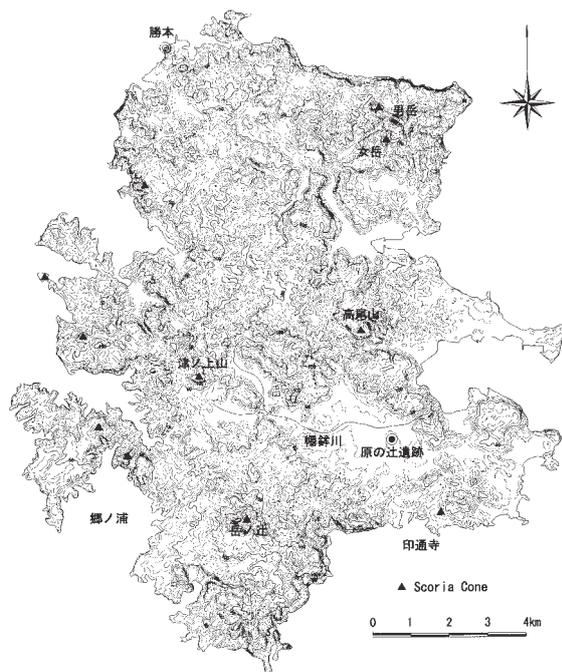
れているかを見ていく。

⑥小型器台

受部の立ち上がりの形態（「なし・僅かにある・短い・伸びる」）とその外反の程度を見ていく。脚部形態（「内湾・直線的・外反気味・外反」）について見ていく。

（2）一括資料の検討

今回掲載する原の辻遺跡の竪穴建物跡出土の一括資料を第1表に示す。



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 原の辻遺跡地区割り図

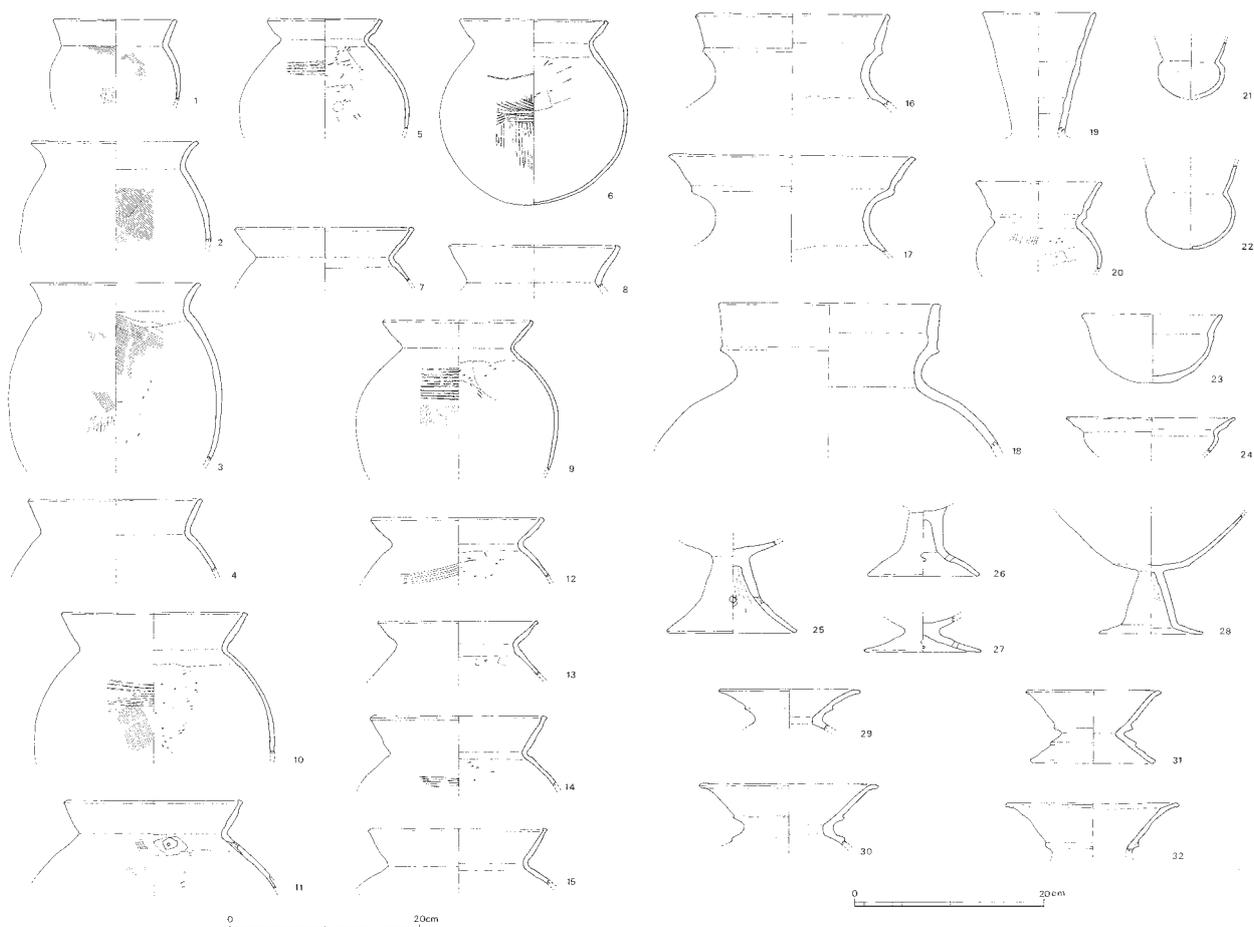
第1表 遺構一括資料一覧

報告書名	遺構名	報告書での時期	重複・出土層位等	備考
NH11	H8原SC10	井上古墳前期3～4式	4号環濠を切る。	宮崎2005古墳Ⅲ期資料
NH11	H9原SC01	柳田Ⅱb・井上古墳前期2式	他竪穴等との重複なし。床面直上ではなく埋土中だがまとまった廃棄とみられる。	宮崎2005古墳Ⅱ期資料
NH1	H17安国寺A沼状遺構	古墳前期	4層一括資料	耳附短頸壺 宮崎2005Ⅳ期資料
NH1	H13八反SD02	弥生終末～古墳初頭	Ⅱ層一括資料	三耳附短頸壺
NH26	H14高元SB01	古墳前期	床面直上出土。弥生中期SK06を切る。SB02を切る。未掘SC1に切られる。	
NH26	H14高元SB02	井上古墳前期1式	床面直上出土。SB06・07を切る。SB01に切られる。	
NH26	H14高元SB05	井上古墳前期1式	埋土中の一括廃棄。SB07と重複する。	
NH28	H15高元SC08		弥生中期SK15・SC10を切る。	
IK9	H17原SC02	古墳時代初頭	SC03～05を切る。	軟質土器
IK9	H17原SC22		トレンチ調査。SC24を切る。	
IK9	H17高元SC12	古墳初頭		
IK16	H21高元SC04	弥生終末～古墳初頭	SC03を切る。	瓦質土器

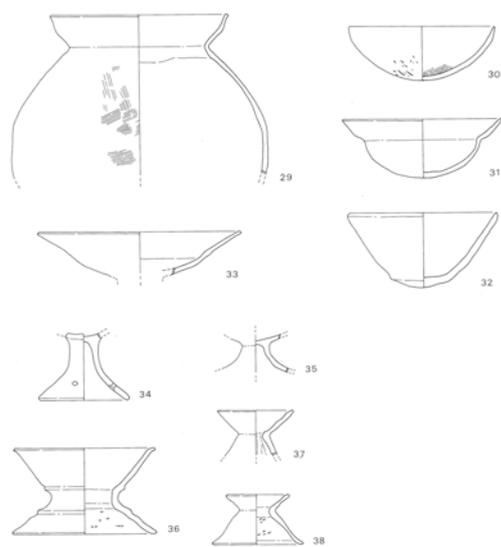
遺構名は「調査年次、地区名、遺構略号」を表記する。例)平成9年度高元地区SC01：H9 高元 SC01
報告書名は略称で表記する。略称は次のとおり。

NK:長崎県文化財調査報告書 NH:原の辻遺跡調査事務所調査報告書、NM:長崎県埋蔵文化財センター調査報告書、AS:芦辺町文化財調査報告書、IS:石田町文化財調査報告書、IK:壱岐市文化財調査報告書、HH:原の辻遺跡保存等協議会調査報告書

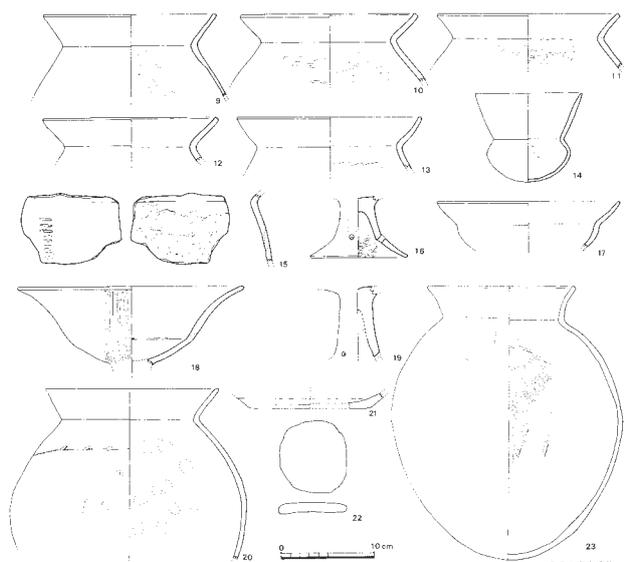
例)長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集:NM18



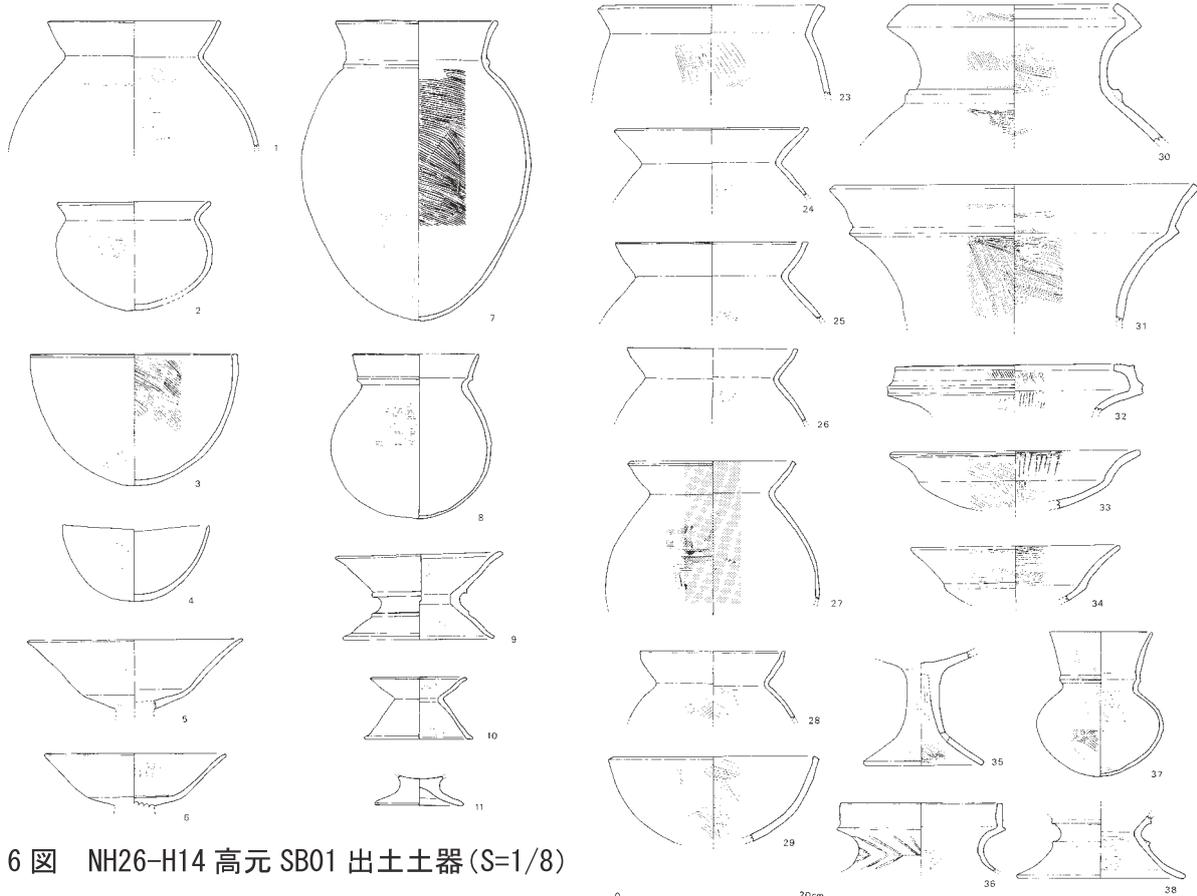
第3图 NH11-H9 原 SC01 出土土器 (S=1/8)



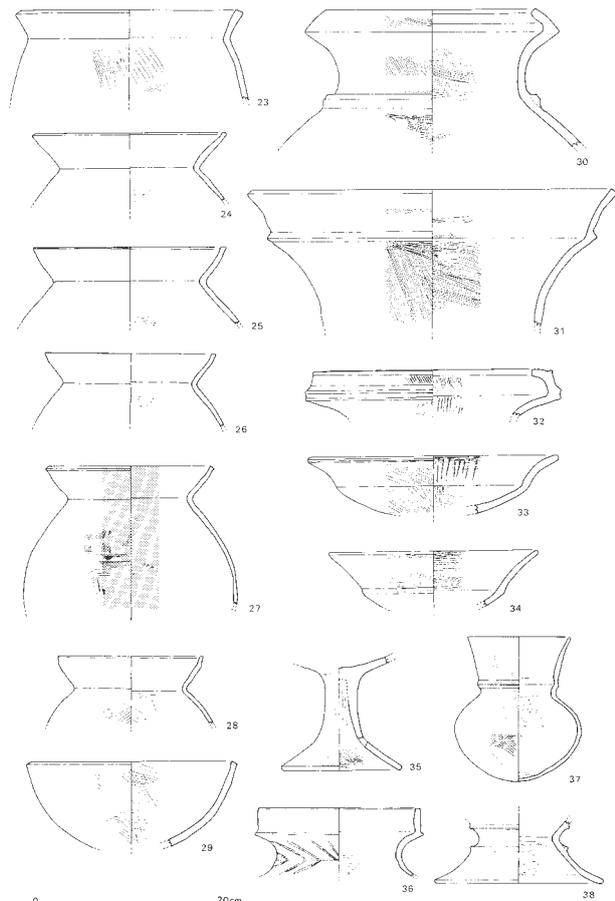
第4图 NH11-H8 原 SC10 出土土器 (S=1/8)



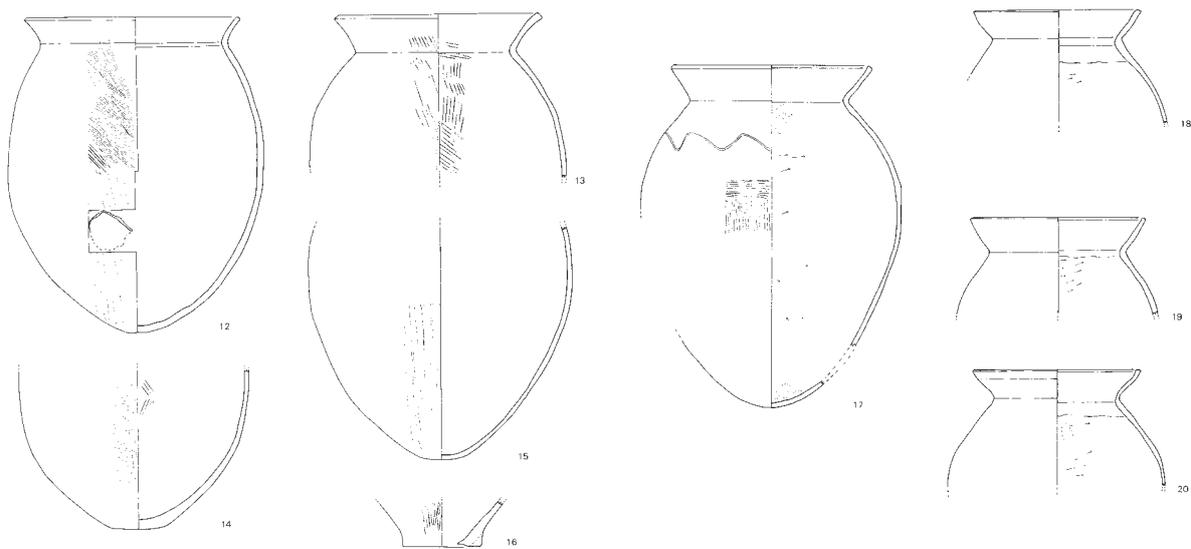
第5图 NH28-H15 高元 SC08 出土土器 (S=1/8)



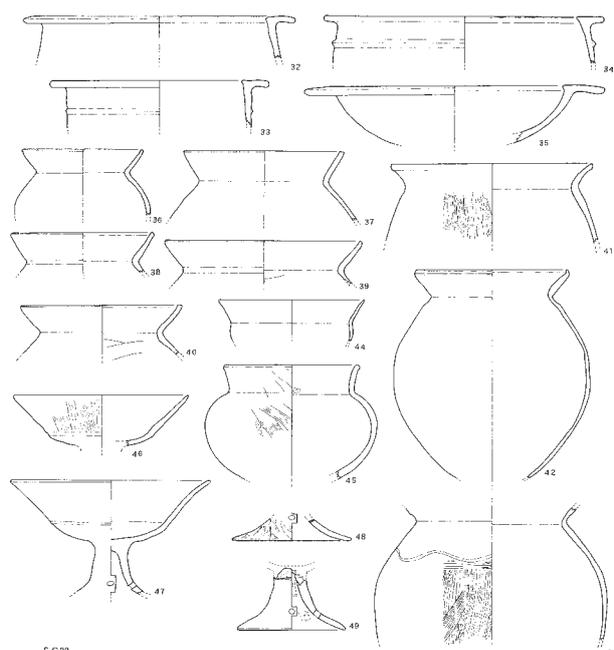
第 6 图 NH26-H14 高元 SB01 出土土器 (S=1/8)



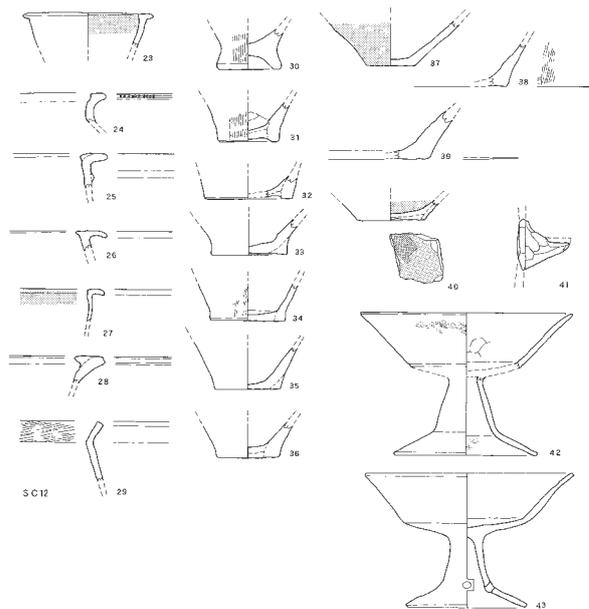
第 7 图 NH26-H14 高元 SB05 出土土器 (S=1/8)



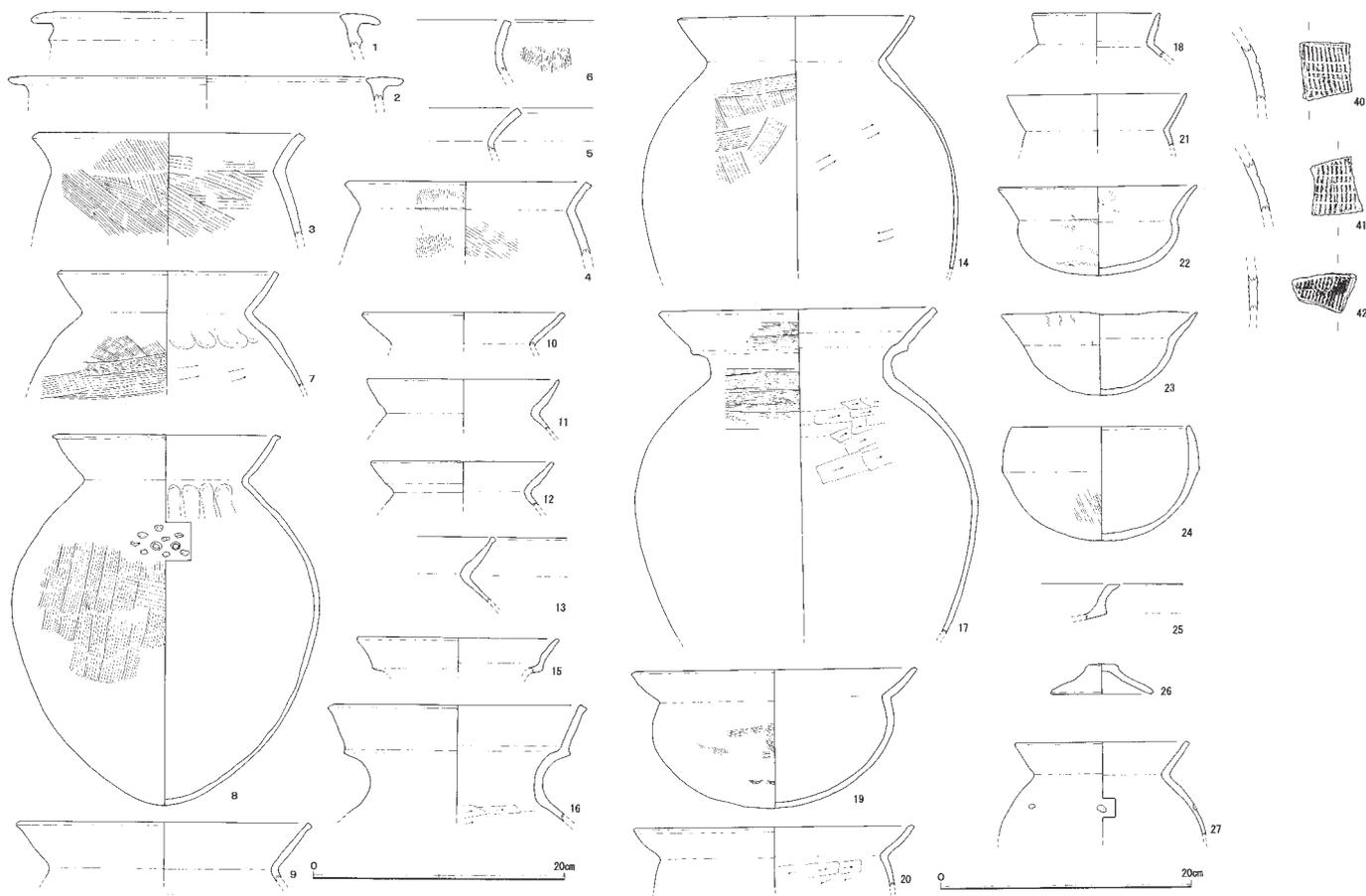
第 8 图 NH26-H14 高元 SB02 出土土器 (S=1/8)



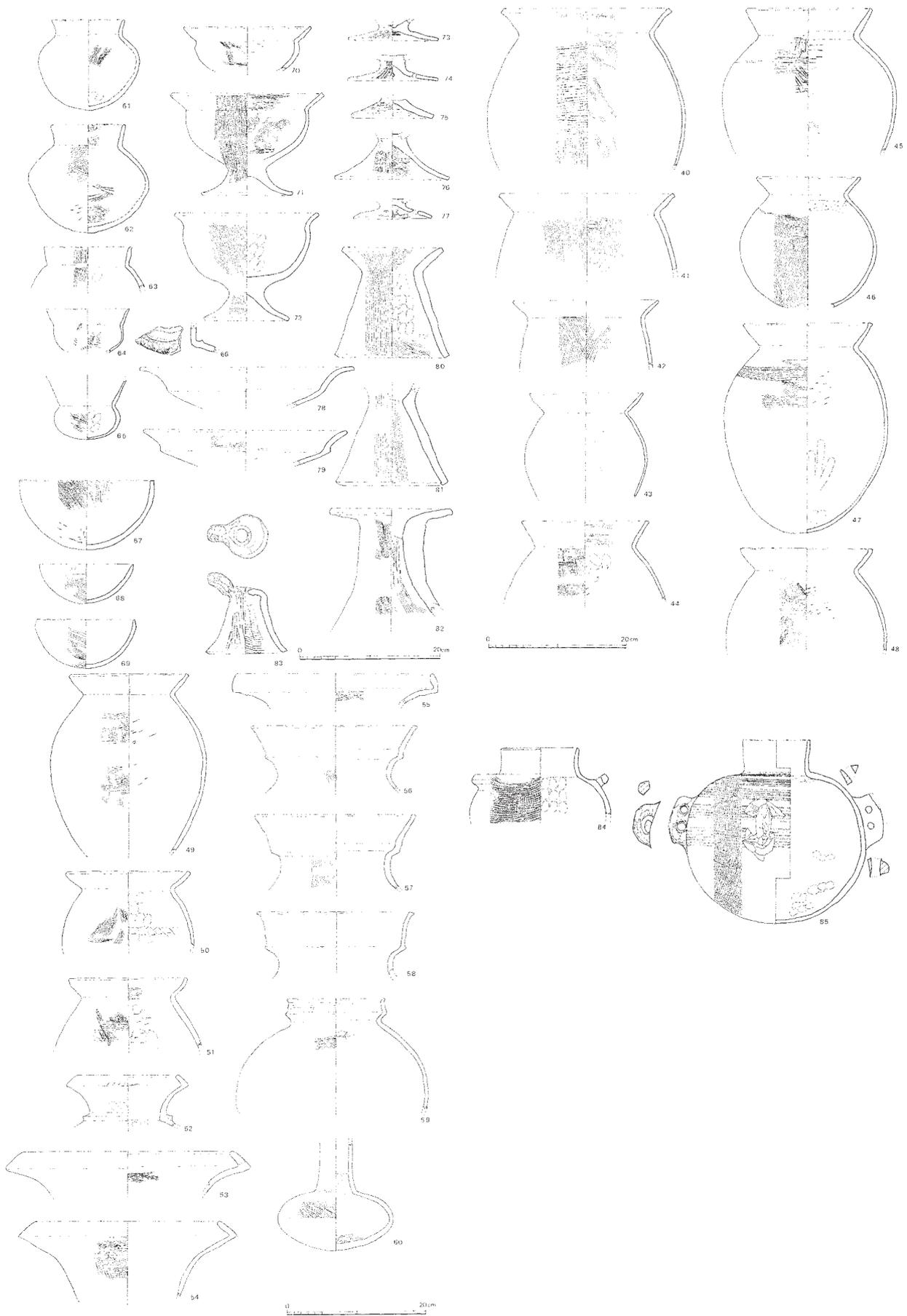
第 9 图 IK9-H17 原 SC22 出土土器 (S=1/8)



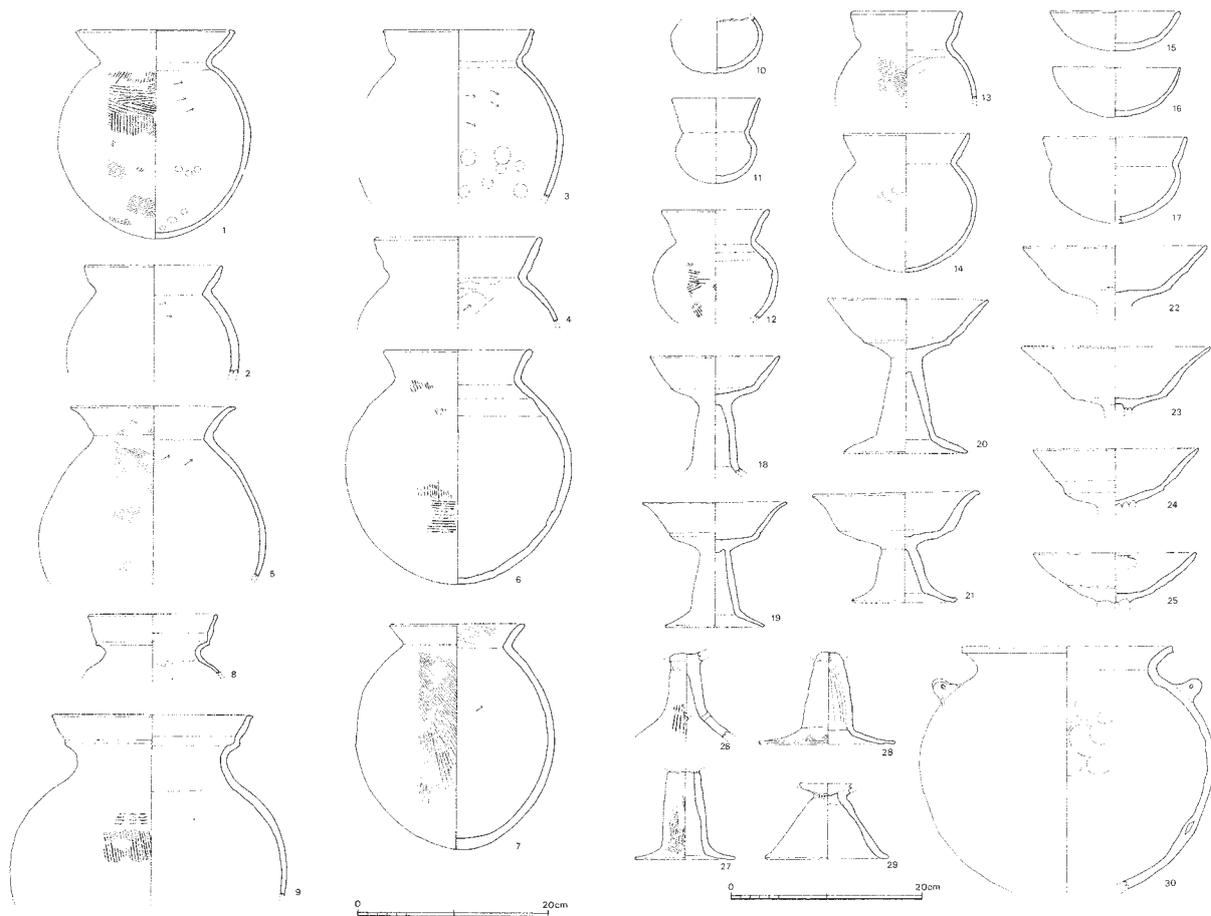
第 10 图 IK9-H17 高元 SC12 出土土器 (S=1/8)



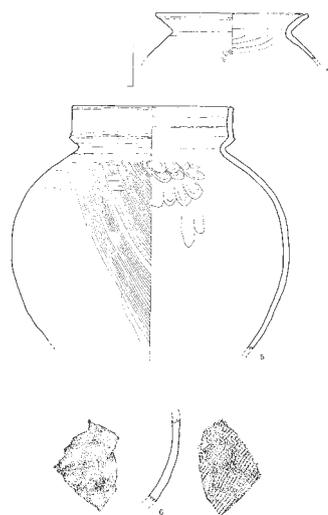
第 11 图 IK16-H21 高元 SC04 出土土器 (S=1/8)



第 12 图 NH24-H13 八反 SD02 II 層出土土器 (S=1/8)



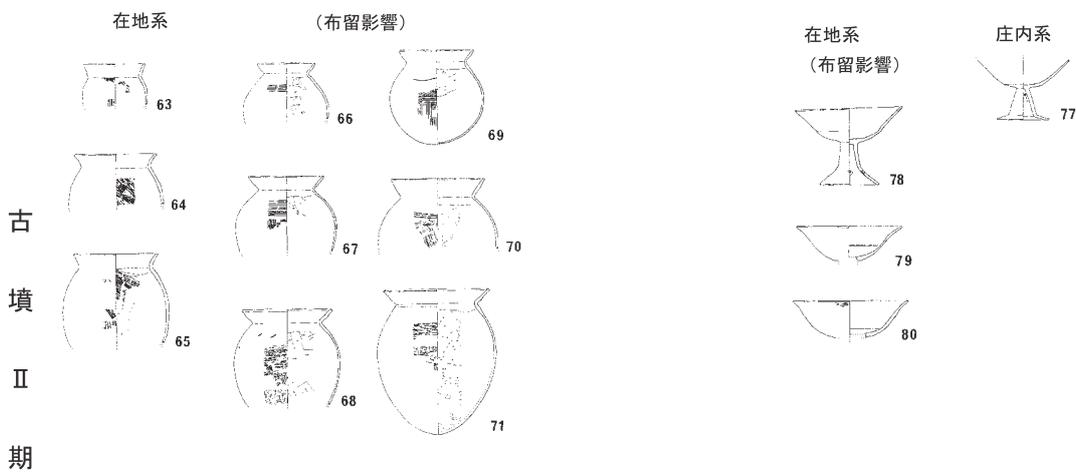
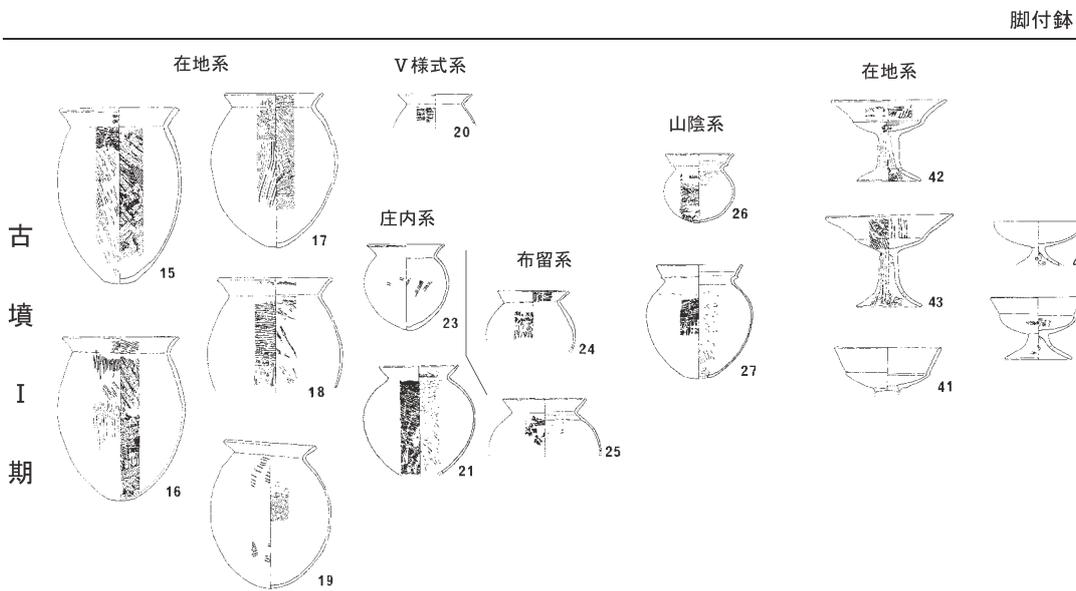
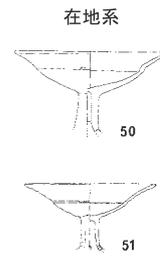
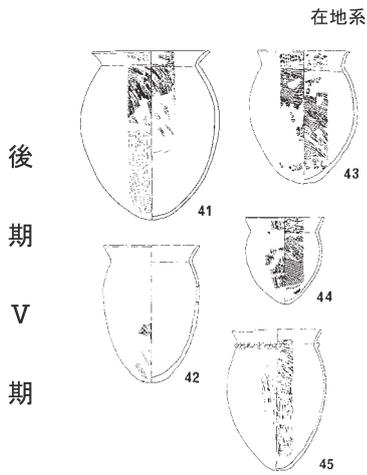
第 13 図 NH1-H7 安国寺 A 沼状遺構 4 層出土土器 (S=1/8)



第 14 図 IK9-H17 原 SC02 出土土器 (S=1/8)

甕

高坏



第 15 図 吉岐島における古式土師器編年 [甕、高坏] (S=1/16) ※宮崎 2005 を一部改編

【在地系甕】 口縁く字・長胴・胴部径上位・体部ハケメ・平レンズ～尖底

【在地系鉢】 口縁く字 or 椀状・杯部深め・平レンズ～尖底

【在地系大形鉢】 口縁く字・平レンズ～尖底（・三角突帯）

【在地系高環】 上半部やや外反・長大化（環部の1/3～1/2）・脚部ラッパ状

- ※尖底の登場
- ※高環の口縁部が長大化
- ※袋状口縁が退化した複合口縁壺がなくなる
- ※土製支脚の登場



【在地系甕】 口縁く字・長胴・胴部径中位・レンズ・尖底～丸底

【V様式系甕】 口縁く字・タタキ目・胴部径中位・丸底

【庄内系甕】 口縁く字で端部摘み or 外反・タタキ目・胴部径上位～中位・尖底

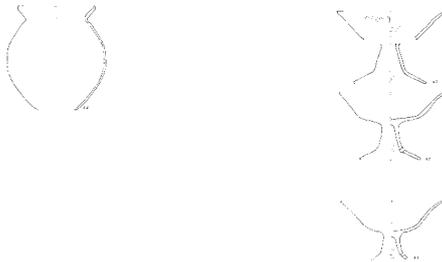
【布留傾向甕】 口縁端部肥厚 or 摘み

【山陰系甕】 複合口縁・口縁開き気味・丸底

【山陰系小型甕】 複合口縁・球形胴・丸底

【在地系高環】 口縁直立してやや開く or 外反して開く・環部が深めで上半部 1/2・脚部ラッパ状

- ※山陰系・畿内系の登場
- ※広口壺がなくなる
- ※小型丸底器種の登場



【在地系甕】 口縁外反・長胴・胴部径中位・丸底

【在地系甕(布留影響)】 内湾口縁・肩部ヨコハケ・長胴・丸底

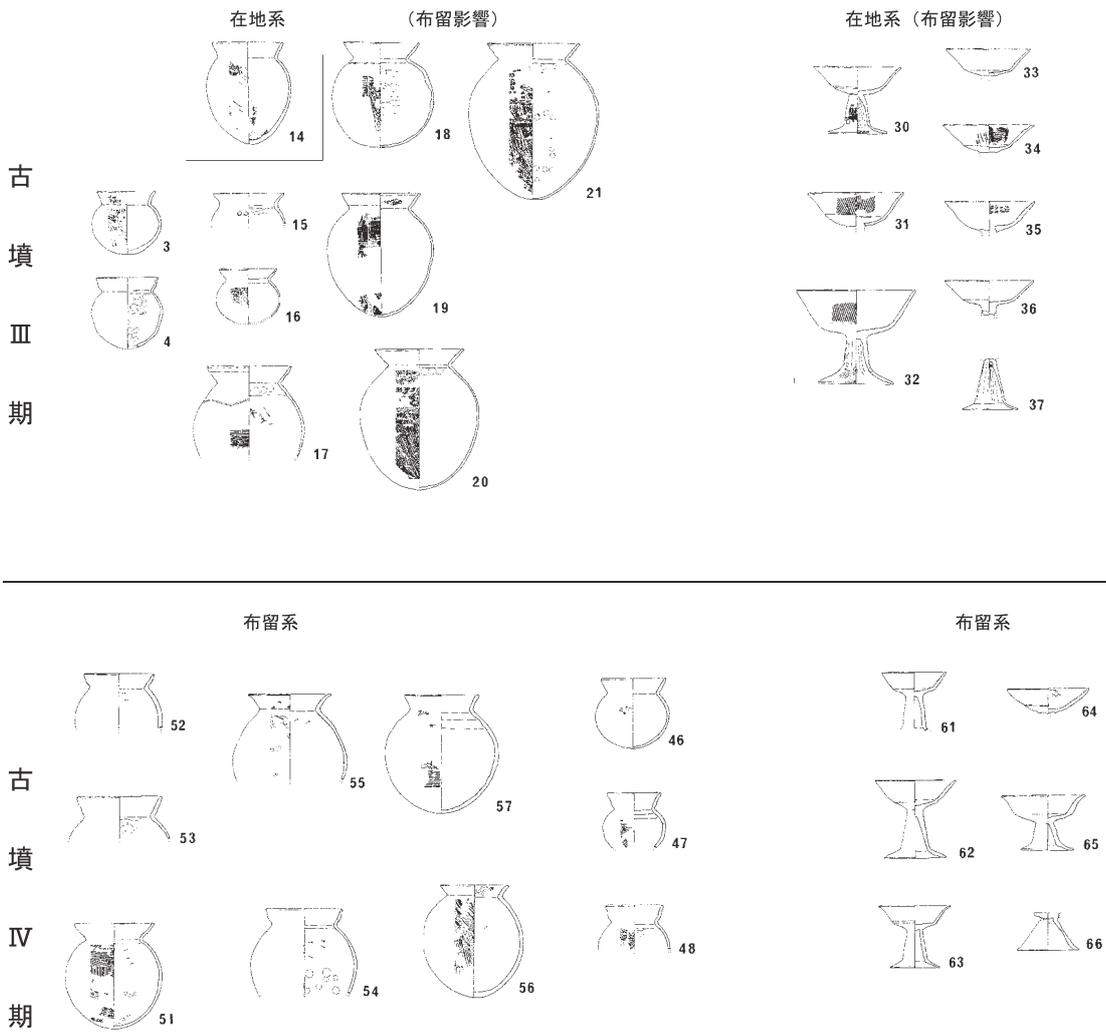
【布留系甕】 内湾口縁・口縁端部丸める or つまむ・頸部ケズリ・球形胴・丸底

【在地系高環】 口縁やや外反・環部深め・脚部ラッパ状

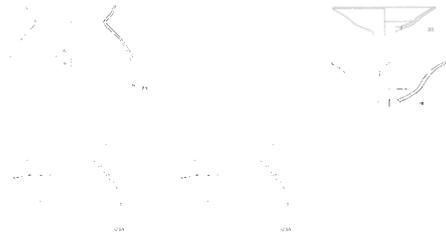
- ※在地系器種の減少
- ※布留系甕が主流に
- ※丸底化が進行

甕

高坏



第 16 図 壹岐島における古式土師器編年 [甕、高坏] (S=1/16) ※宮崎 2005 を一部改編



※高環脚部がエンタシス状に
 ※小型丸底壺の口縁が長大化する
 ※X字型小型器台の登場

【在地系甕】 口縁く字・端部丸める・長胴・丸底
 【布留系甕】 口縁直線的・端部面取・頸部ケズリ強い・球形胴 or 長胴気味

【在地系高環】 口縁直線的 or やや外反・脚部ラッパ状 or エンタシスで屈曲が強い（布留影響）

【布留系甕】 口縁やや内湾 or 外反・端部丸める or 肥厚・球形胴

【布留系高環】 口縁直線的 or 外反・脚部エンタシス・屈曲強い

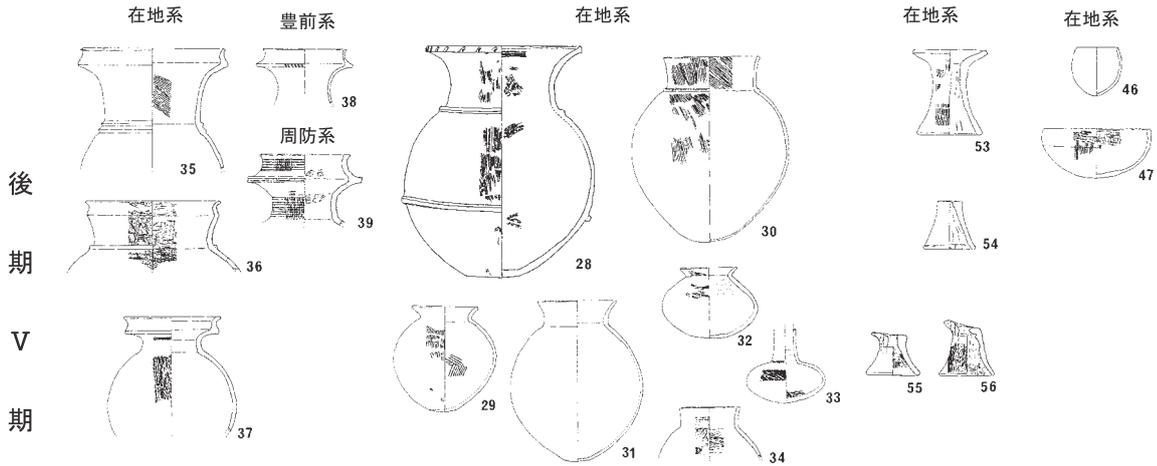
※高環の脚部が細く長くなる
 ※壺・甕の胴部が球形に

第2表 編年対照表

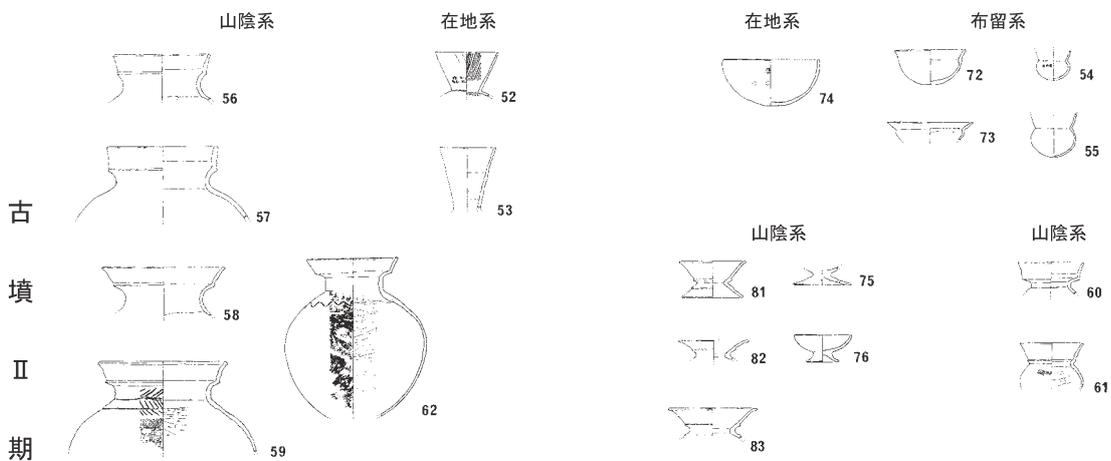
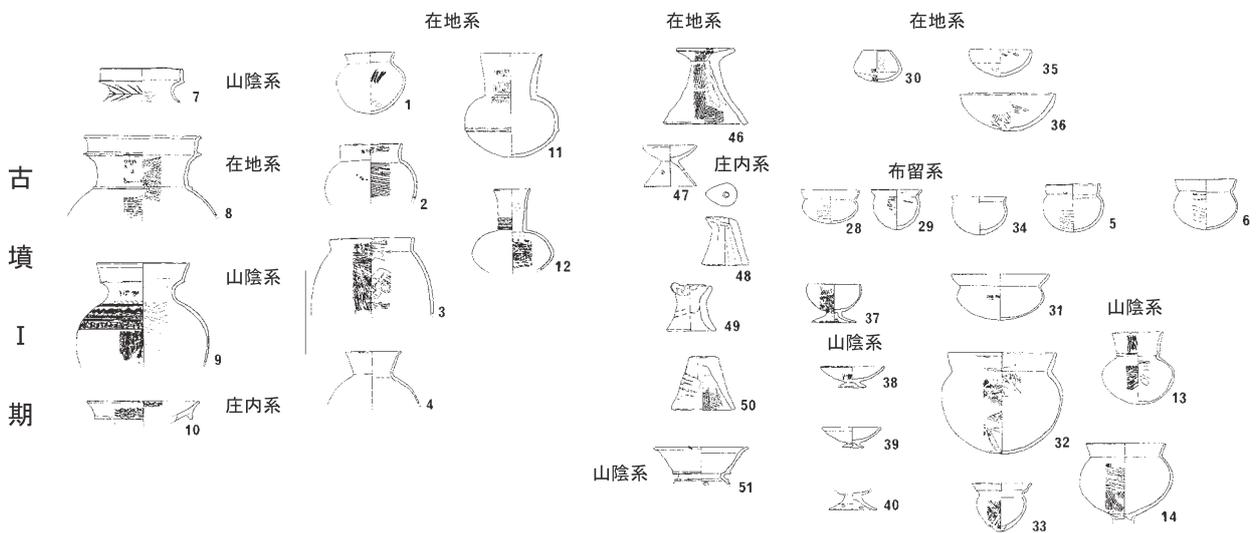
	在地型式	宮崎2005	松見2016	久住1991		柳田1991	井上1991
弥生時代後期後葉	下大隈式新	弥生後期Ⅳ期	Ⅴ期			後期5式古	後期後葉1式
弥生時代終末期	西新式古	弥生後期Ⅴ期		ⅠA期	庄内古	Ⅰa式	後期後葉2式
				ⅠB期	庄内新	Ⅰb式	後期後葉3式 古墳前期1式
古墳時代前期初頭	西新式新	古墳Ⅰ期	Ⅵ期	ⅡA期	布留0	Ⅱa式	
古墳時代前期前葉		古墳Ⅱ期		ⅡB期 ⅡC期	布留0～Ⅰ中 布留Ⅰ新	Ⅱb式	古墳前期2式
古墳時代前期中葉		古墳Ⅲ期		ⅢA期古 ⅢA期新	布留Ⅱ古 布留Ⅱ新	Ⅱc式	古墳前期3式
古墳時代前期後葉		古墳Ⅳ期		ⅢB期	布留Ⅲ	Ⅲa式	古墳前期4式

二重口縁壺

器台 鉢



小形器種



第17図 壱岐島における古式土師器編年 [壺、小型器種] (S=1/16) ※宮崎 2005 を一部改編

【在地系複合口縁壺】 二次口縁外反・頸部太く長め・長胴・胴部径上位（・三角突帯）

【在地系広口壺】 口縁外反・球形胴 or 長胴・尖底（・台形突帯）

【直口壺】 長胴・尖底（・三角突帯）

【長頸壺】 扁球形胴・平レンズ～尖底

【筒形器台】 受部が広く浅い

【土製支脚】 支脚

※尖底の登場

※高環の口縁部が長大化

※袋状口縁が退化した複合口縁壺がなくなる

※土製支脚の登場



※山陰系・畿内系の登場

※広口壺がなくなる

※小型丸底器種の登場

【鼓形器台】 受部が浅い・裾部が内湾気味

【小型器台】 受部立上りなし・裾部八字

【土製支脚】 支脚

【山陰系器台（鼓形器台）】 口縁端部外反・くびれ部に面を持つ

【在地系複合口縁壺】 口縁直立 or 端部外反（施文有）（三角突帯）

【山陰系複合口縁壺】 口縁直立 or 外傾

【在地系直口壺】 口縁直立 or ハ字・球形胴 or 長胴・尖底（・脚台付）

【庄内系複合口縁壺】 櫛目文・竹管文

【在地系長頸壺】 口縁直線的・球形胴・突帯

【山陰系長頸壺】 端部やや外反・櫛目文・半裁竹管文

【山陰系小型壺】 複合口縁・口縁長めで直立

【小型丸底壺・鉢】 口縁短めで内湾

【山陰系台付鉢】 低脚付鉢（坏部皿状）



【山陰系複合口縁壺】 二次口縁直立 or ハ字・頸部屈曲 or 面有（・施文有）

【在地系長頸壺】 口縁直線的でハ字に開く

【山陰系小型壺】 複合口縁・口縁やや短めで開き気味

【小型丸底壺】 口縁やや内湾・やや長く伸びる

【小型丸底鉢】 口縁直線 or 有段

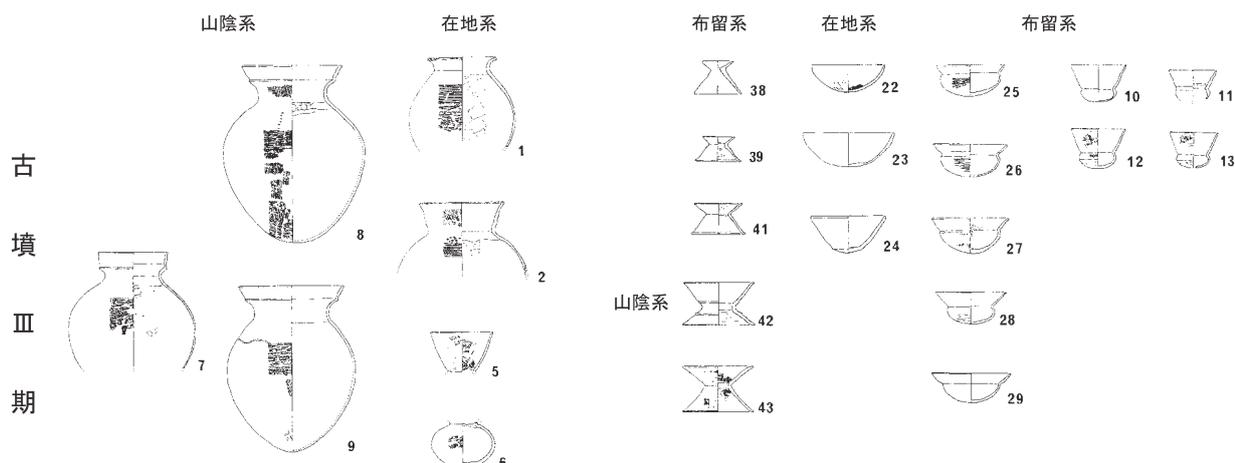
【山陰系鉢】 低脚付鉢（坏部碗状）

【山陰系器台（鼓形器台）】 扁平化・口縁端部外反・くびれ部屈曲 or 面有

※在地系器種の減少

※布留系甕が主流に

※丸底化が進行



第 18 図 壱岐島における古式土師器編年 [甕、高坏] (S=1/16) ※宮崎 2005 を一部改編

2. 壱岐島における古式土師器の編年

(1) 弥生後期Ⅴ期

長胴で胴部中位に最大径がくる在地の甕や、広口壺、直口壺などで、レンズ底に加えて尖底をなすものが出現する時期である。二重口縁壺の二次口縁が立ち気味になり、強く外反するようになる。

また、高坏の口縁部が杯部の 1/3 ~ 1/2 程にやや外反しながら長く伸びるようになる。土製支脚が登場するのはこのころである。

(2) 古墳Ⅰ期

庄内系や布留系の甕、山陰系の二重口縁壺や器台が出現する時期である。畿内系器種とともに、小型丸底器種も出現する。この時期になって、畿内系及び山陰系の土器群が一気に流入したと言える。

また、在地の壺では、弥生時代を通じて使用されてきた広口壺に代わって、直口壺や長頸壺が主流となる。在地系の器種でも、丸底のものが一部出現する。



※高坏脚部がエンタシス状に
 ※小型丸底壺の口縁が長大化する
 ※X字型小型器台の登場

【複合口縁壺】 口縁直立 or ハ字・頸部屈曲

【広口壺】 口縁外反・端部沈線・長胴

【直口壺】 口縁直線的・端部面取

【長頸壺】 口縁やや内湾・扁球形胴

【小型丸底壺】 口縁長大化・直線的で開く・扁球形胴

【小型丸底鉢】 口縁直線的 or 有段

【小型器台】 受部立上りなし・口縁径が小さい or 大きい・裾部端部直線的 or やや外反・中空

【山陰系器台（鼓形器台）】 口縁端部外反・くびれ部屈曲

【山陰系壺】 口縁ハ字・頸部屈曲

【小型壺】 口縁く字 or 二重

【小型丸底壺】 口縁直線的・口縁が短くなる

【小型丸底鉢】 口縁内湾

※高坏の脚部が細く長くなる
 ※壺・甕の胴部が球形に

(3) 古墳Ⅱ期

在地の器種が少なくなり、布留系や山陰系の器種が主流となって、丸底をなすものが増える時期である。畿内系及び山陰系土器群の定着期である。

脚柱部が中膨らみしている高坏が見られるようになる。在地の器種である筒形器台や土製支脚は見られなくなる。

(4) 古墳Ⅲ期

長胴をなすものが減り、倒卵形の胴部か球形胴をした器種が増える。小型丸底壺の口縁が長大化する時期である。細く、長い脚部をした高坏が現れる。

また、この時期にX字形小型器台が出現する。

(5) 古墳Ⅳ期

原の辻遺跡の消滅後の時期であり、当該期の資料数は少ない。ほとんどの甕や壺の胴部が球形になる。脚部が細く長く高坏が増え、杯部はやや小さくなる。

3. まとめ

古墳Ⅰ期以降に見られる外来系の土器群について、畿内の伝統的Ⅴ様式系や庄内式系の特徴を持つ土器は少なく、布留式系や山陰系の特徴をもつ土器が圧倒的に多い。二重口縁壺においても、古墳Ⅰ期を境に、在地のものから山陰系の二重口縁壺に代わっていく。器台でも、在地の筒形器台が次第に淘汰され、山陰系の鼓形器台や小型器台に代わっていく。甕では、布留式系の影響を受けつつ長胴をなすもの（布留影響甕）が出現する。

また、原の辻遺跡では多くの大陸・半島系土器が出土している。弥生時代終末期～古墳時代前期においては、原三国時代三韓地域の瓦質土器や三国時代の陶質土器が中心となっている。これらは河川跡や環濠、溝状遺構での出土が圧倒的に多い。竪穴建物跡や土坑等での出土事例もあるが、多くは破片で埋没過程における混在である可能性もあり、共伴関係を追うことが難しい（古澤2016）。

完形品等残りの良い資料は環濠や溝状遺構の出土で、層位一括であっても共伴する古式土師器には時期差がある場合が少なくない（NH24-H13 八反 SD02）。一方で NH1-H7 沼状遺構 4層資料は比較的時期幅が狭く一括性は高いと言える。

原の辻遺跡では、竪穴建物跡出土の一括資料が少なく、また、出土土器も破片資料が多いうえに複数時期にわたる場合が少なくない。このような状況から、むしろ、環濠の単一層出土資料の方こそ一括性が高いといえるのではないだろうか。

<引用参考文献>

- 赤坂亨 2006 「筑前・肥前北部の前期古墳」『前期古墳の再検討』
井上裕弘 1991 「北部九州における古墳出現期の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』
久住猛雄 1999 「北部九州における庄内併行期の土器様相」『庄内土器研究 XIX』
古澤義久 2016 「2. 大陸・半島系土器」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』
古澤義久 2016 「邪馬台国時代の壱岐」『邪馬台国時代の狗邪韓国と対馬・壱岐』
松見裕二 2016 「1. 弥生土器」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』
宮崎貴夫 2005 「Ⅴ 遺物」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』
柳田康雄 1991 「土師器の編年 2 九州」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』

本稿は2017(平成29)年に刊行された第19回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料集『九州島における古式土師器』に掲載されたものを同研究会の了解を得て再掲したものである。(事務局)